あの春の日に

直斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの春の日に

【Ｎコード】
Ｎ２６７５Ｙ

【作者名】
直斗

【あらすじ】
両親を亡くした兄妹が毎日を楽しく生きていた…
そんなある日、突然それは起こった

また新しい季節がやってきた
春が来たのだ
一番好きな季節
一番嫌いな季節
そして…3年前もっと嫌いな季節になった
大切な人を奪った季節

――3年前
「桜空、今年の春もお花見しような」
私たちは毎年家族全員で花見に行くのが習慣だった
「約束だよ春人。でもその前に早く学校行かないと遅刻しちゃうよ
あと15分で予令の鐘がなる」
「マジかよ早く学校行くぞ桜空」
「いってきます」私たち兄妹は元気よく家を出た

「春人眠そうだね」私は笑いながら言った
「勉強してたから寝不足なんだよ。俺は学年1位の桜空と違ってそこまで成績優秀じゃないからな」あくびをしながら春人は答えた
「一番頭の良い高校通ってるし10位以内に入るか入らないかくらいだから大丈夫だよ」
「そうか？」
「なんなら勉強教えてあげるよ？春人」
「じゃあ教えてくれ」
「わかった。じゃあ家帰ったら教えてあげる」
「ありがとう」
私は時間を確認するために携帯のディスプレイを見たディスプレイ

には４／１６　８：１７と映っていた。そしてもう一つ…
「そっか…今日はパパとママの命日だね…」
「今日は４月１６日か…」
「学校帰りにパパとママのお墓に行こっか」
「そうだな」
「でもその前に急いで学校行こ」
「あぁ」

―キーンコーンカーンコーン
ガラッ！
「間に合ったぁ」
「ギリセーフか」
「おはよう。桜空ちゃん、春人」
「おはよう海斗君」
「おはよう海斗」
「おはよう桜空」
「おはよう美姫」
ガラッ
「起立、礼」
「おはようございます」
「着席」
「みんなおはよう。今日の予定は特になし自由時間にしていいよ。それから龍千兄妹は職員室に来て」
「はい」
「お前らなんかやらかしたか？」笑いながら海斗が言った
「なんもやってねぇよ。たぶん小山内先生が俺と桜空を呼ぶってことは生徒会の呼び出しだよ俺達役員だし」
「なるほど」
「じゃあまたあとで」

「生徒会長、副会長おはようございます」
「おはよう」
「おはよう」

「失礼します。小山内先生」
「あぁ来た来た。」
「御用件はなんでしょうか？」
「急で悪いんだけど今日生徒会会議を開いてほしいの」
「今日…ですか」
「なにか大切な用事があるの？」
「あ、いえその…少しだけなら大丈夫です」
「そっか」
「それより何かあったんですか？」
「うん？あぁ違う違う。」笑いながら答えてくれた
「今度この学校の近辺にある高校との生徒会交流が急に決まって。その事を決めておきたくてね」
「わかりました。他の生徒会役員には連絡してあるんですか？」
「えぇ」
「では今日の放課後に生徒会会議を開くんですね。会議室で会議をするのですか？それとも生徒会室ですか？」
「会議室を放課後にとってあるわ」
「わかりました。では」
「えぇ。急に決めてしまってごめんなさいね」
「いえ」

「春人なんだった？」
「生徒会会議の緊急招集だった」
「放課後に話し合いたいことがあるんだって」
「へぇ」

「ではこれより会議を始めます。本日の議題は他校との生徒会交流の予定の組み合わせ及び段取りの確認です。何か質問や意見のある人はいますか？」
「はい」
「花園さん」
「質問なんですが他校との交流会はいつ行う予定なんですか？」
「急で悪いと思うのですが予定では来週の火曜日に行う予定です」
会議室中がザワついた。その時小山内先生が言った
「みんなごめんなさいね。急に決まってしまって」
「龍千生徒会長」
「なんですか？柚木君」
「他校とはどこですか？」
「桜崎高校と月島高校を予定しています」

――2時間後
「では本日の会議は終わりですみんなこんな時間までありがとう」
「じゃあ報告書まとめてもらってもいいかな？龍千」
「もう作ってあります。どうぞ」
「ありがとう。相変わらず仕事が早いわね」
「では、小山内先生さようなら」

「春人。パパとママのお墓…行こ」
「あぁ」

「ねぇ…春人。パパとママは幸せだったのかな？」
「どうしたんだよ。急に」
「私、記憶が曖昧だからパパもママも幸せだったのかなって」私は家族で過ごした時間のほとんどがない

「…きっと幸せだったよ父さんも母さんも俺たちといれて幸せだったって言ってた」
「私…酷いよね。パパもママも大好きだったはずなのに何も覚えてないんだもん本当に酷いよね…」
「仕方ないさ…桜空の記憶が曖昧なのは父さんと母さんの死がショックだったからだ。一時的なものだから心配しなくてもすぐに思い出せるよ」
「パパ…ママ」
春人は私をそっと抱き締めてくれた。
私は泣いてしまった。
「ありがとう春人。帰ろっか」
「あぁ」

「ただいま。パパ、ママ」
「ただいま」
「すぐにご飯作るね。その間勉強しておいてね。分からないところはあとで教えるから」
「あぁ」

「春人ご飯できたよ」
「わかった」
「いただきます」
「いただきます」
「さすが桜空。おいしいよ」
「よかった。ところで分からないところはあった？」
「問題集で1問だけ」
「わかった。そこだけ教えるね」
「あぁ。ありがとう」

「ごちそうさま」
「ごちそうさま。うまかったよ」
「ありがと。じゃあ勉強しよっか」
「あぁ」

「だからここをこうしてこの公式を当てはめるのあとはこれを計算して…そう」
「なるほど。そういうことか」
「わかった？」
「あぁ。ありがとう」
「どういたしまして。じゃあ私は食器片付けるかな」
私たち兄妹はこんな毎日を過ごしていた楽しくて少し寂しい毎日を…。でもある日私の目の前で春人は事故にあった。私が原因で起きた事故だった。

「桜空帰ろうぜ」
「うん」
そして校門を出てすぐに話しかけて来た人がいた
「ちょっと龍千桜空」
「えっと…宮谷さん？どうしたの？」
「春人様といつもくっついてるんじゃないわよ」
「兄妹だから帰る方向が同じなのだから仕方ないでしょう？」
「あなたのせいで私たちはっ」そう言いながら私を突き飛ばした。
その先は…車道だった。
運悪く車が来るところだった。
ひかれる！…パパ、ママ！
「桜空！」

春人が車道に出て私を車が来ていない反対側の車線に押した。そして…春人が車にはねとばされた
「何…これ…私の…記憶？」私は我に帰った
「春人！」
「春人様！」
私は一瞬彼女に向かって睨んだ
「ぁ…」
私は他の生徒に救急車と先生を呼んで来てほしいと頼んだ
すぐに救急車は来た
「ご家族の方ですか？」
「はい」
「乗って下さい」
いつの間にか救急車に揺られていた
…あの時の記憶は私の…過去…

「龍おじさん春人は！？」
「意識不明の重体…このまま目を覚まさない可能性も…ある」
「そんな…なんとかならないの？」
「こればかりはどうしようもないよ桜空ちゃん。ただ…春人君の生きたいという強い願いと桜空ちゃんが諦めなければあるいは…」
「本当？」
「可能性はある。実例もあるんだよとてもすくないけど事故で意識不明になって数年後に目を覚ますという人もいるのはいる」
「龍おじさん春人をお願いします。春人がいなくなっちゃったら私はひとりぼっちになっちゃう」
「桜空ちゃん」
「パパもママもいないのに私は…私は！」
「桜空ちゃん落ち着いて」
「ひとり…ぼっちはイヤ…イヤ…イヤァ」

「桜空ちゃん！」
「あ…」
「大丈夫かい？」
「ごめ…なさ…龍おじさん」
「姉さんたち…桜空ちゃんのお父さんとお母さんの時と重なってしまってるんだね」
「そうかもしれない…私が車にひかれそうになったとき春人が助けてくれたその時に思い出したの、全部」
「姉さんたちの時は即死だったからどうすることもできなかった…でも春人君は死んでいない。春人君はきっと目を覚ますよ。だって桜空ちゃんがいるんだから。その日まで待っていようね」
「ありがとう龍おじさん。春人をお願いします」
「桜空ちゃんならいつでもお見舞いに来ていいからね」
「うんありがと」
そう言って家に帰った

「ただいま…。パパ、ママ春人を助けて。私ひとりぼっちはイヤだよ。ひとりに…しないで…」

――ピーンポーン
誰だろ
「はい…」
「龍千さん大丈夫？」
「小山内先生」
「ごめんなさいねこんな時間に」
「いえ…誰もいないので気にしないで下さい」
「ご両親は？」
「小山内先生にはお話ししていませんでしたね。両親はいません２人とも２年前の４月１６日に交通事故で亡くなりました」

「4月16日って…あの緊急生徒会会議のあった…」
「はい…」
「そうだったのね。ごめんなさい」
「いえ。かまいません。お墓参りには行けたので」
「そう…ところで龍千君はどうだった？」
「上がってください。立ち話では疲れますでしょう？」
「ありがとう。お邪魔するわね」
「どうぞ」

「春人は意識不明の…重体です。このまま目を覚まさない可能性もあると龍おじさんに言われました」
「龍おじさん？」
「この町の祖父の病院…夏目総合病院を継いだ母の弟夏目龍哉です。龍おじさんの病院は設備が整っているので春人が目を覚ます…あるいは亡くなるまで入院させることになりました」
「そう…辛いわね」
「はい…」
「龍千君速く目が覚めるといいわね」
「はい…」
「宮谷さんの処分は今校長先生たちが緊急の職員会議を開いて決めているわ」
「そうですか」
「どうしたの？」
「宮谷さんがどうなろうが私には関係ありませんから宮谷さんが処分されたからって春人の容態は変わりませんから」
「たしかにそうね。じゃあそろそろ帰るわね。また明日学校で会いましょう」
「はい。今日はわざわざこんなところまで来てくださってありがとうございました」

「いってきますパパ、ママ」

「おっはよぉ桜空」
「おはよう桜空ちゃん」
「おはよう…美姫、海斗君」
「あれ？春人は？」
「…」
「龍千さん校長室まで来てもらえるかしら」
「…はい」

「龍千さん宮谷さんの処分は決まりました」
「そうですか」
「龍千さん…ごめんなさい。こんなことになるなんて私、思わなくて」
「…」
「本当にごめんなさい。私が死んで貴女の気がすむなら…私は死んでもいい」
「貴女が死んでも春人の容態は変わらない。そんなバカなこと言うんだったら自分がしてしまったことがどんなことだったのかしっかり反省して！」
「龍千さんこの件について全校生徒に知らせてもいい？」
「はい。いずれ分かることですから速めにお願いします」
「わかったわ」

「先日本校2年生の龍千春人君が交通事故にあいました。それにより意識不明の重体。みんなで目を覚ますことを祈りましょう」

「桜空ちゃん大丈夫？」
「…海斗君。大丈夫だよ」

「桜空辛くなったらいつでも相談してね」
「ありがと美姫」

そして数日がたったその日の昼休み。

「桜空ちゃん」
「なに？海斗君」
「放課後残れる？話があるんだ」
「少しだけなら平気」
「じゃあ放課後に教室で待っててくれないか」
「わかった」

「話ってなに？」
「俺、桜空ちゃんのこと好きだ」
「…」
「この学校に入って一緒のクラスになったその時からずっと。それに今は桜空ちゃんを支えていた春人もいない…だから俺が桜空ちゃんを支えていきたいんだ。だから…俺と付き合ってくれないか？」
「…そのきもちは嬉しいけどごめん。今の私には海斗君の気持ちに応えられない。春人が意識不明で目を覚まさなくて、両親が交通事故で亡くなった時の記憶を思い出して今の私の心の中はいろんな感情がぐちゃぐちゃになっていろんなことがわからなくなったの…」
「…そっか」
「でも…友達でいてね」
「あぁ」

春人が目覚めぬまま1日、1日と時は過ぎていった
そして今年の4月になった。
春人は3年間眠ったまま。まだ目を覚まさない。

そして私は3年間笑うこともなく生徒会の仕事ばかりをしたり海斗と春人と通うはずだった大学に入学して通った。生徒会の後輩も入学してきた。春人のお見舞いにはほとんど行かなくなっていた。

「桜空先輩少しは休んでください」
「心配してくれてありがとう。でも私は大丈夫だから」
「先輩…」
「仕方ないよ…桜空ちゃんにとって春人は最後に残されたたった一人の…唯一の家族だったんだその春人が生死の境にいる今少しでも仕事に集中して忘れたいんだろ」
「海斗先輩！でも…桜空先輩が体を壊してしまったらもともこもないじゃないですか」
「でも俺たちにできることはない」
「そうですけど…」
「今は見守っているしかないんだ…」

そんなある日龍おじさんが家に来た。
「桜空ちゃんたまには春人君のお見舞いにおいで」
「龍おじさん…春人に会っても春人は目を覚まさない声も聴こえない辛くなるだけだから…」
「違うよ桜空ちゃん。いくら眠っていても声は届くんだよだから春人君に会おう？それに…桜空ちゃんがこなくなってから春人君体調があまりよくないんだ」
「え…」
「だから行こう？」
「…うん」

「春人…ごめんね。お見舞いこなくて。3年たっちゃったよ…4月になっちゃったよ。お花見、できないじゃん春人がいなきゃ。…春人の嘘つき。花見しようって言ったのに。約束したのに。誕生日も

一緒に祝えないじゃない春人のバカどうして私なんか庇ったの」
「桜空ちゃん…泣きたいのなら泣けばいいよ」
「…泣けないの。心はとても苦しいのに、泣きたいのに、涙がでないの」
「桜空ちゃん…感情を殺すのを止めよう?感情というのはとても大切だ。悲しいと思うそしたら涙も自然にでてくる」
「ぁ…」
感情が一気に溢れた
生徒会長だからまわりに心配かけていられない、大学生になって忙しいからと思っていつの間にか感情も殺してしまっていたのだ

「うぅ…春人…目を覚ましてよ…いつもみたいにいっぱいお話ししたいよ…」
この時私はやっと…やっと泣けたのだ。春人が事故にあってからやっと。
「龍おじさんありがとう」
「どういたしまして。明日は学校休みだよね?」
「うん」
「じゃあ明日またおいで」
「うん。じゃあまた明日来るね」

「ただいまパパ、ママ」

――ピーンポーン
「はぁい」
「龍千さん」
「小山内先生!お久しぶりです。どうされたんですか?」
「ちょっと心配になっちゃったの。前に会ったとき龍千さん辛そう

な顔をしていたから」
「そんな顔してましたか？」
「えぇ」
「どうぞ上がってください」
「あら、ありがとう」
「紅茶いれますね」
「…龍千さん笑顔に戻ったわね」
「え？」
「最近の龍千さんは笑わなくなっていたもの」
「そう…ですね。そうかもしれません。どうぞ」
「ありがとう」
「私春人があんなことになってから心は苦しいのに悲鳴をあげてたのに私は泣けなかったんです一度も」
「そうなの」
「感情も気付かない内に殺してしまっていました」
「先生に相談してくれればよかったのに」
「そうですよね。でも私は両親が亡くなってから龍おじさん以外誰にも頼らない暮らしをしてきたんです。だから頼ることができなかった」
「そうなの…」
「親族以外は頼っちゃいけないって考えが私たちのなかにあったんです」

「それじゃあそろそろ帰るわね」
「はい。訪ねてくださってありがとうございました。楽しかったです」
「私も龍千さんに久々に会えて楽しかったわ。龍千君が眼を覚ましたら連絡ちょうだいね」
「はい、足下暗いですから気を付けてください」

「さようなら」

「龍おじさん！来たよ」
「桜空ちゃんおはよう」
「おはよう」
「元気になったね」
「うん龍おじさんのおかげだよ」
「春人君も早く元気になるといいんだけどね」
「春人ならきっと目を覚ます…私は信じてる絶対に元気になるって」
「今日ここに来てもらったのはねお花見をするためだよ」
「お花見？」
「そう。約束していたんだろう？春人君と」
「そうだけど…こんなところで？」
「あぁそうか桜空ちゃんは夜にお見舞いに来るから知らないんだね この部屋は特別な部屋なんだ。姉さんと義兄さんの…桜空ちゃんのお母さんとお父さんの病室なんだよ」
「ママと…パパの？」
「そうこの部屋のカーテンを開けると…」そう言って龍おじさんはカーテンを開けた
「ほら、桜が見えるんだ。特等席なんだよ。姉さんはここが大好きだったんだ。だからここの病室は誰にも解放していないんだ親族以外はね」
「へぇ」
「桜空ちゃんは自分の名前の由来を知ってるかい？」
「春に生まれたからって聞いたけど」
「確かにそうだ間違ってはいないねもっと詳しくは知らないのかい？」
「昔に聞いたかもしれないけどわからないの」
「桜空ちゃんと春人君が生まれた日はね満開の桜が空をおおってい

たんだそれに姉さんたちは桜が大好きだった。だから桜の空と書いてさくらちゃんになったんだ」
「そうだったんだ…じゃあ春人は？」
「姉さん達は春人君の名前にも桜って入れたかったらしいんだけど…男の子だからさすがに難しくてね。春に生まれた人って書いて。はると君になったんだ」
「そうなんだ…」
「春人君はね昔姉さん達にあることを言ったんだ」
「あること？」
「うん。春人君は姉さん達の前で桜空は俺が守るって言ったんだ」
「春人が？」
「そうだよ。だからきっと春人君は…」
「龍おじさんそんな昔の話をださないでくれよ」
「春人！」
「春人君！目を覚ましたんだね」
「よかった…ほんとによかった…春人」
「じゃあとりあえず検査をしよう」
「わかった」
「じゃあその間私はちょっと電話してくるね」
「ああ」

「もしもし小山内先生」
『龍千さん？どうしたの？』
「春人が…」
『龍千君がどうしたの！？』
「春人が目を覚ましました」
『本当に！？』
「はい！」
『今からそっちに向かうわ』
「はい」

「もしもし海斗君？」
『桜空ちゃん？』
「うん」
『どうしたの？』
「今すぐ夏目総合病院に来てほしいの」
『なんかあった？』
「春人が目を覚ましたの！」
『マジか！？わかったすぐ行く』
「うん。ありがと」

「どこも異常なしだ。あと2週間ほど様子を見て大丈夫そうだったら一度家に帰ってみよう」
「退院できるのか？」
「このまま体調がよければね」

「龍おじさん。小山内先生と海斗君がお見舞いに来るって通してもらってもいい？」
「もちろん」
「海斗か…久しぶりだな…」
「みんな3年ぶりだよ」
「それもそうだな」

進み始めた大切な人の時間
進み始めた私の時間
春は大切な人を助け、私に幸せを運び
再び好きな季節へと変わった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2675y/

あの春の日に

2011年11月6日02時07分発行